

「まえがき」

理念（イデア）が真実在であるならば、理念（イデア）恋愛というものは実在するものであろうか。真であり、善であり、美であり、聖である恋愛というものは実在するものであろうか。これは、西洋哲学でいえば、プラトン以来の課題である。

地上のありとあらゆる現象は、理念（イデア）の影である。それ故に移ろいゆき、すべては夢幻の如しなのである。しかし、理念（イデア）界というものは、永遠普遍である。そこには、永遠普遍の真理があり、道徳律があり、芸術があり、神聖さがあるのである。このような「精神性」に目覚めてゆく過程にとって、「恋愛」とは、永遠普遍の触媒であるといえるのである。

J・J・ルソーは、人間は肉体として一度誕生し、精神として思春期に二度目の誕生を迎えると述べられたが、思春期とは、多くの場合、十七歳前後ではないかと思われるのである。それ故に、十七歳の時期に創っていた詩歌をもとにして、十七歳前後の魂の息づかいを、「詩」という形式に表現し、「短歌」という形式に表現し、その中に、およそそのストーリー性が入ったものが、「第二の誕生～イデアへの飛翔～」である。

第一部は、「蒼い光～ツインソウル～」であり、第二部は、「心の森～ソウルメイト～」

であり、第三部は、「桜咲く園」である。この書を素材にして「ストーリー」を顕現化し、「小説」や「脚本」にして頂けたならば、作者にとってこの上ない幸いである。

JDR総合研究所・代表 天川貴之